2005 年 12 月 20 日

人間科学研究科長　殿

宍戸　佳織氏　博士学位申請論文審査報告書

宍戸佳織氏の学位申請論文の予備審査を 2005 年 12 月 19 日に終了しましたので、ここにその結果をご報告いたします。

記

１．申請者氏名　宍戸　佳織

２．論文題名　　中国茶文化と茶館
　　（副題名　中国浙江省杭州市の事例）

３．博士申請論文の評価
①本論文の目的と特色
本論文は、著者が留学していた中国浙江省およびその省都である杭州市における茶文化と茶館の歴史的変遷と社会的・経済的機能を考察するものである。わが国において中国茶の研究は、歴史的経緯もあってかなりの先行研究がなされてきているが、茶館とそこで演じられる茶芸に関する研究はまだほとんど手つかずの状態である。本論文は中国語を自家薬籠中のものとし、留学中に茶芸師の資格すら取得した著者が、自らの現地生活や実地調査、さらに関係者・関係機関からの聞き取りや膨大な文献渉猟によって、主題に迫った文字通りの労作である。
②本論文の構成
まず、序論において、著者はマルコ･ポーロを嚆矢とし、1980 年代のフランス系アメリカ人のポール・セローにまでいたる、さまざまな欧米の中国旅行者の旅行記から、彼らの目に映った中国茶のありようを紹介する。
第 1 章「中国における茶の起源と分類」では、薬神神農と茶との神話的な出会いを論じた後、中国茶文化の以後の発展に決定的な役割を果たした、唐代の陸羽（８世紀）に着目し、その著『茶経』を論じる。茶の起源や製茶道具、茶器、茶の入れ方、飲み方、歴史などから産地に至るまで、幅広く論じたこの書を通して、著者は唐代における茶文化の実情を析出する。そして、この茶が広

東と福建から世界各地に広まっていったとする。こうして《茶》という語は、tea や thé、 あるいは（t）chaï と呼ばれるようになった。『日本後記』に記された入唐僧永忠が、9 世紀初頭に嵯峨天皇に自ら煎じて献上したのも、唐の茶だった。

次いで、著者は中国茶の６大分類（緑茶・黄茶・黒茶・青茶・白茶・紅茶）に触れ、中国人にとくに賞味されている緑茶の製法や評価法（四絶）を紹介し、浙江省を代表する西湖竜井茶（後述）についても言及する。

第２章は、調査地である杭州市の歴史相と現況が詳細に論じられている。この章の特徴は、南宋の都府であり、マルコ・ポーロをして《地上の楽園》と言わしめた同市とその一帯がなぜ今日のような茶生産と（茶）文化の一大中心地になったかが、歴史的経緯や風土、経済的・人口論的条件を通して考察されているところにある。

「宋代の杭州における茶文化」と題された第３章では、茶の生産が飛躍的に増大した宋王朝の茶保護策が論じられている。それによれば、国境防備に腐心していた王朝は、利潤の大きな塩や茶を専売制とし、国境に軍需品を納入する商人に対してのみ、塩や茶の販売を許可する塩引・茶引なる証書を発行したという。つまり、そこでは塩と同様、茶の流通・消費が国防と密接に結びついていたというのである。だが、宋代の茶を普及させたのはそればかりではない。そこではとりわけ南宋時代の爆発的な人口増加や食料生産力の増大、交易路の拡大、さらに現代まで受け継がれている東坡肉に代表されるような食文化の多様化もあったとする。そして、何よりも宋王朝の芸術や茶への尋常ならざる嗜好である。事実、徽宗皇帝は、『茶経』と並ぶ茶文化の聖典とも言うべき『大観茶論』（1107 年）を著すほどだった。

こうした流れに呼応するかのように、茶自体も大きな変化を遂げるようになる。唐代には粗茶・散茶・末茶・餅茶に４分類されていた茶は、餅茶に由来する固形茶の片茶と茶葉の形状を残した散茶とに２分されるようになる。著者は『大観茶論』のほか、やはり宋代に編まれた『茶録』や『茶具図賛』といった茶書に依りながら、これら２通りの茶の性質や栽培法、入れ方などについて、技術論的な側面をも重視しつつ詳述する。

本論文の主題である茶館は、陸羽の時代に書かれた『封氏聞見記』に初出するが、それが本格的に発展するのは、商業が活発化し、それに伴って生活も多様化した宋代だという。そこでは茶館は単なる飲茶・社交の場としてだけでなく、情報交換や商取引、集会、さらにはもめ事の仲裁などに場を提供するようになったという。

一方、宮中では闘茶と呼ばれる一種の茶のテイスティング・コンクールも開かれるようになった。著者はその様子を克明に説明しているが、こうして必然

的に茶の改良機運が高まっていった。また、この闘茶とともに熟達した茶芸（茶器で茶を飲ませる技）も披露され、茶は新しい文化を構築していくようになる。そしてその文化はやがて民衆世界にまで普及していくようになる。

だが、闘茶の文化が普及を見たのは、ひとり宋国内にのみ留まらない。著者はその具体的な事例を、隣国遼の高官一族が遺した宣化遼墓の内壁画にみる。その内容の大筋はすでに学会誌に発表しているが、ここで披瀝されたきわめて詳細な分析は本論文の白眉といって過言ではない。

第 4 章では、前章で言挙した茶館と茶芸が、19 世紀から今日に至るまでどのような変遷を辿ったかが跡づけられている。それによれば、近代中国における庶民文化の一翼を担った茶芸は、1949 年の中華人民共和国の建国から文化大革命期まで、他の芸術活動ともども圧殺され、文革後の 1980 年代になってようやく復活の気運が高まったという。興味深いことに、これには日本の茶道も少なからぬ影響を与えたともいう。

やがて茶と茶芸を提供する茶芸館も各地でつくられ、さらに改革解放時代の大衆文化ブームのなかで、マスコミや知識人たちが中国の文化的・歴史的アイデンティティを象徴する装置として、茶文化を積極的に再評価するようになる。その背景には、日本やアメリカへの中国茶葉の飛躍的な輸出拡大もあった。こうして茶関連の人文・科学専門書が刊行され、大規模な研究会や展示会、品評会などの各種イヴェントも中国各地の都市で頻繁に開かれるようになる。

第 5 章では、中国全体と浙江省、および杭州市の茶葉貿易の変遷を、統計資料によって検討されている。

そして第 6 章では、現在の杭州市における茶学の研究・教育機関を通観した後、茶のさらなる品質改良と茶文化のより高度な発展を目指すための《評茶制度》の様子が語られている。かつての闘茶の流れをくむこのテイスティング制度は、茶芸師培訓班によって教育された評茶員が、色や香りなどを点数化して判断するものだが、冒頭で紹介しておいたように著者もまた杭州市の培訓班に参加し、国家が認定する茶芸師（評茶員）の資格を得ている。それだけに、自らの体験も加味した評茶システムに関する記述は詳細にわたり、中国茶芸の現在がきわめて具体的に理解できる。

終章では、それまでの単なるまとめに終わらず、杭州市の茶文化に対する中国国内外の関心も語られている。たしかにそれは杭州市の観光戦略の成果をつとに物語るものであるが、中国の伝統文化を現代的に制度的にアレンジし、それを世界に発信しようとする矜持と期待の現れではないか。著者はそう指摘して擱筆する。

③本論文の評価

本論文は、中国茶の歴史的・文化社会的性格を学術論文として見事に収斂させたものといえる。その内容は、少なくともわが国で発表された先行研究と較べ、いささかも遜色なしと考えられる。たしかに標記に若干の乱れはあるが、それは本論文の学術的価値を何ら損なうものではない。茶の通文化的考察があれば、さらに論文としての価値は高まるであろうが、それは今後への課題として期待したい。以上のことから、下記審査委員会は本論文を学位論文として認めるものである。

４．宍戸佳織氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）（早稲田大学）	蔵持不三也
審　査　員	早稲田大学教授	Ph.D.（ＵＣＬＡ）	森本　豊富
審　査　員	早稲田大学教授	学術博士（筑波大学）	寒川　恒夫
審　査　員	早稲田大学教授		谷川　章雄
審　査　員	女子栄養大学教授		秋野　晃司

以上